

A型口蹄疫ウイルスの感染実験での病態

O型に加えて、A型の口蹄疫が、韓国、中国、東南アジア等で発生しており、それぞれ我が国への侵入リスクが高まっている。



牛及び豚で近年タイで分離されたA型口蹄疫ウイルスの感染実験を実施し、臨床症状やウイルス排せつ状況を確認。

* 使用ウイルス A/Thai/46-1/2015
(本年2月に韓国で発生したウイルスと同じポタイプ・系統)

※2000年、2010年の日本における口蹄疫の発生は全てO型によるもの

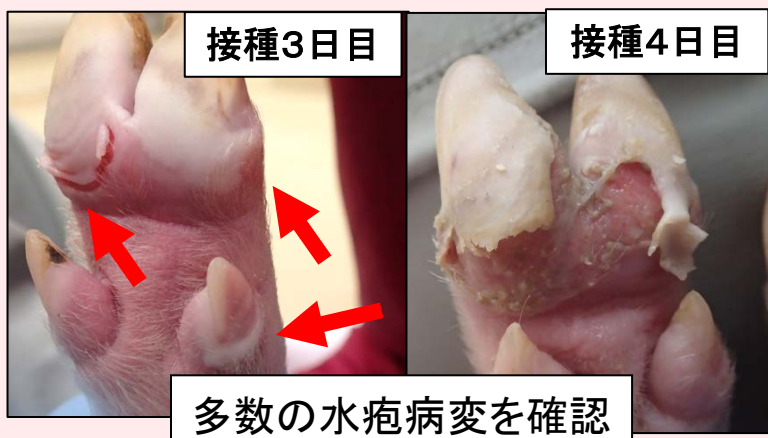
牛の病態

- ・口唇や蹄の趾間に水疱形成
- ・感染初期から、唾液から多量のウイルスを排せつ
- ・発熱・流涎のない個体もいたので注意



豚の病態

- ・強い水疱病変が発現
- ・感染初期から、唾液や蹄の水疱から非常に多量のウイルスを排せつ



今回の感染実験では、牛では水疱は趾間に見られ確認が難しく注意が必要。牛でのウイルス排せつ量や、豚での症状とウイルス排せつ量は典型的。

⇒ **牛では、1頭のみに着目すると見落とすおそれがあるため、流涎する個体が多い、症状が急速に広がるなど、群としての異状の有無を確認することが重要。**

注：7つある口蹄疫の血清型のうち、東アジアで問題とされている口蹄疫の血清型はO型、A型、Asia1型の3つ。